

特集 果樹における凍害対策

果樹における凍害対策

クリでは従来凍害の発生が問題となっていたが、近年の暖冬傾向により耐凍性が低下し、被害が助長されると考えられている。また、産地再生に伴う新植が進む水田転換園や造成地では特にその被害が大きいことから、立地条件による危険度判定に基づく効率的な凍害対策が求められている。一方、西日本一の産地形成を目指すイチジクにおい

ては、主要品種の「榊井ドーフィン」の耐凍性が低く、凍害対策が必須とされている。そこで、従来の稲わらに替わる効果的な防寒資材を考案したので紹介する。

吉田 晋弥（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

凍害が発生しやすいクリ園地の立地条件

クリ幼木における凍害の発生は、年次間差とともに園地間差が大きかったが、標高が比較的低く、傾斜度が小さい水田転換園で多く、逆に標高が比較的高く北向きの傾斜園地で少なかった。

内容

本県では、産地再生を目指してクリの新植が進められているが、凍害による枯死樹等の発生が問題となっている。凍害発生には園地間差が大きい。そこで、幼木園25か所の立地条件と凍害発生の関係を2012～2014年に調査した。

標高別では、73～244mの範囲内では150m以上で被害程度が低い園地が多いのに対して、それ以下では被害程度の比較的高い園地がみられた（データ略）。

東、西及び南向きの傾斜園地では凍害の発生があったが、北向きの園では凍害の発生は認められなかった（データ略）。

傾斜度別では、5°以上の園地で被害程度が0.2以下であったのに対して、平坦地では被害程度の高い園地が多かった（図1）。

園地の種類では水田転換園で被害程度が高く、山林では低かった（図2）。

今後の方針

各条件と凍害発生の関係について、気象や土壤等の面から要因の解析と対策を検討する。

水田 泰徳（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

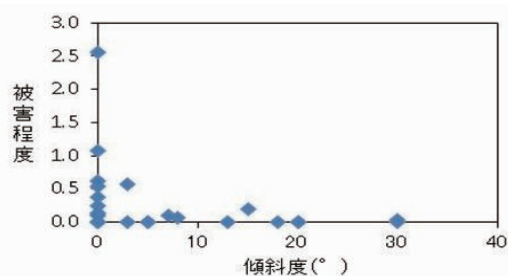


図1 園地の傾斜度と被害程度
被害程度 = \sum 被害指数 \times n (被害樹数) / 調査樹数, 被害指数: 0 = 被害なし, 1 = 1年生枝が枯死, 2 = 主枝、亜主枝の一部が枯死, 3 = 穂木部の半分以上が枯死, 4 = 全体または穂木部が枯死, 調査園地数25

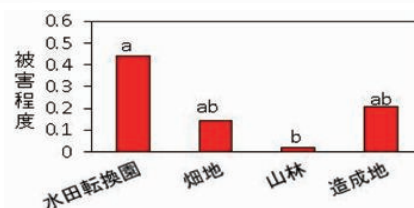


図2 園地の種類と被害程度
被害程度は図1と同じ, 水田転換園:9園, 畑地:4園, 山林:8園, 造成地:4園, 棒上の異なる文字間には有意差有(5%)